別子往還道を訪ねて

最終回　口屋周辺、そして記憶の継承へ

元禄15年（１７０２年）、現在の口屋跡記念公民館がある場所に、銅の積み出し港として新居浜口屋（浜宿）が設けられます。最短距離での銅の運搬路確保によるものでした。

以来、口屋は明治26年（１８９３年）に別子鉱山鉄道の惣開駅ができるまで銅運搬の中心地として栄えます。その後も、村から町そして市へと役場（役所）が置かれ、新居浜発展の中心地となります。江戸時代から新居浜の発展を見続けてきた「口屋あかがねの松」は、愛媛県の史跡指定を受けています。

昭和２年（１９２７年）、別子銅山の責任者であった鷲尾勘解治（わしおかげじ）は、銅の採鉱が末期にあるため、鉱山業に代わる新居浜再興のための後栄策を発表します。そのひとつが、埋め立てによる工業地確保とその地に新たな産業を興すこと、そして大動脈としての昭和通りでした。昭和通りに架かる３つの橋に鷲尾は、将来の新居浜発展を祈念して、「共存・共栄・申孝」と名付けます。現在３つの橋は新しく付け替えられましたが、橋の名前はそのまま受け継がれています。

口屋あかがねの松

「別子往還道」は、新居浜発展の中心軸としての歴史を重ね、今も多くの跡を辿ることができます。かつての鉱山鉄道下部線跡の一部は、自転車道として整備されています。また、立川中宿から喜光地間には、多くの常夜燈や句碑が遺されており、自転車や徒歩により楽しむことができます。

ドイツでは、150もの「街道観光」を楽しむルートがありますが、その多くは市外からの観光客の誘致とともに、そこに住んでいる人たちが余暇を楽しむためのものです。

新居浜市の「別子往還道」も、第一級の街道観光のルートであり、常に新しい発見があります。また、別子銅山記念館や住友化学歴史資料館、マイントピア別子など、そのルート沿いには優れた博物館や施設もあり、同時に楽しむことができます。

新居浜市では「別子往還道」を中心とする生活史を後世に伝え、子どもたちに地域への愛着や誇りを持ってもらおうと「別子往還道記憶の継承・地域の絆」に取り組んでいます。

何も難しく考えないでください。喜光地での夜市の思い出。登り道で映画を見たこと。別子大丸で買い物をしたこと。そのひとつひとつが、「別子往還道　記憶の継承」として残していきたい事柄です。

ぜひ次は、皆さんからのお話を聞かせてください。長い間のご愛読ありがとうございました。

別子銅山文化遺産課

広告欄

広告欄

広告掲載については、ソネ　デザインスタジオ（☎ 0897 - 33 - 5721）へお問い合わせください。